

本田増次郎のこと

石 井 陽 三

「桃山学院九〇年史」に

「一九〇三年（明治三六年）、明治二十八年以来、英語の教員であつた本田増次郎氏が副校長に就任」

という記事があるが、これに対して、元桃山学院大学教授の大谷泰照氏が、本田増次郎の履歴を調べられたうえで、「明治の高名な英語学者、本田増次郎が、かなりの期間、桃山の英語教員であつたかと思わせる記述があり、一般にもそう信じられているようであるが、これは何かの間違ひであろう」と指摘された（桃山学院大学同窓会誌「アンデレ」第九号「桃山と英語」）。確かに、この高名な英語学者の没後、追悼集として発行された雑誌「英語青年」七一二号に載せられた、旧友佐伯好郎の「故本田増次郎君略歴」（以下「略歴」と記す）によれば

「君明治二十四年九月嘉納先生に招かれ熊本に赴き第五高等学校の教授となり在職約二年宣教師団より懇請せられ明治二十六年四月大阪高等英学校（今の桃山中学校）長となり経営三年大に見るべきものありたり」

とあるし、大谷氏が引用された、明治三十七年に津田梅子の女子英学塾（のちの津田塾）に提出した増次郎自筆の履歴書には、明治三十年、東京高等師範学校教授、同三十三年四月、東京外国語学校教授、そして同三十五年四月には

その両方を兼任していると記されているから、九〇年史の記述は大谷氏の指摘どおり、何かの誤りであろう。いずれ「一〇〇年史」で訂正されるであろうが、この機会に、極めて少い資料によってではあるが、旧師本田増次郎について記しておきたい。

「略歴」に拠れば、増次郎は慶応二年一月十五日、美作国久米郡打穴村に生る、とあるが、これも自筆の履歴書によれば、慶応元年十一月生れとあるそうで、後に令嬢華子（作家山本有三夫人）が、「父の思ひ出」のなかで、六年の生涯云々と回顧していることからしても、自筆の履歴書が正しいと考えてよいだろう。

幼少の頃より学問を好み、十七歳の時、医学の道を志し、吉岡寛斎という人物に入門した。ところが、この年の十月には、所謂「明治十四年の政変」が起り、これを機に国会開設の詔書が出されると、自由党をはじめとして相ついで政党が結成され、自由民権運動が最盛期を迎えた時期であった。「略歴」にも

「自由民権の運動、都鄙に起るや、君も亦青雲の志を抱きて東京に遊学せんと志すに至れり」

とある。折角志した医学の道を捨てて、翌年九月飄然と上京した増次郎ではあったが、その後、彼と民権運動との関わりは全くみられないといってよい。

増次郎が上京する三ヶ月程前、嘉納治五郎が若く二十三歳の若さで、下谷北稻荷町の永昌寺に柔道場を開設し、富田常次郎や、後に「山嵐」の大技を編みだして講道館の麒麟児と謳われた西郷四郎らの門弟と、柔道の普及に努めていた。一八八三年（明治一六年）十月

「当時は入門料も道場費も一銭もとらないで却って時には嘉納の方で稽古に来る人達へ馳走してやることさへあった。それだけに待遇しなければ柔道稽古に来る人がなかった」（古賀残星「柔道発達史講道館今昔物語」）

そのような時代に増次郎は入門している。講道館の草創時代である。嘉納を慕って集まった門弟たちによって自然に

形成された「嘉納塾」の塾生として、師範を助けながら自らも相当きびしい修行に励んだようである。一年遅れて入門した宗像逸郎は

「君はその当時から非常なる秀才であって読書でも文章でも書でも弁論でも同輩の間に傑出していた。柔道は特に傑出とはいえなかったが、元来勝気でかつ精力家であつたから非常なる猛練習を続けて確かに当時剛の者の一人であつた。」

と増次郎の人となりを述懐している。

既出の大谷氏の「桃山と英語」によれば、明治十四、五年はわが国で最初の英学の最盛期であつたという。既に一八七三年（明治六年）には、森有礼の「英語国語化論」まで提唱されたそうだが、おそらく条約改正問題で不利な立場に立たされていたわが国にとって、英語英学の普及は国益上緊急の課題であつたろう。こうした情勢下において、一八八四年（明治一七年）春頃より、嘉納や、金子堅太郎の弟で英学者であつた安川辰三郎、後に彦根中学校校長を勤めた田部詮次郎らを中心に英学校設立の話がもちあがり、比較的順調に準備がすすめられた結果、早くも同年九月には開校の運びとなった。神田神保町にあつた弘文館がそれである。ちょうど桃山学院の前身である男子英語塾が、C・F・ワレン長老によって開校されたのと全く同じ時期である。富田常次郎の

「此の弘文館出身の人で後に英文学者として中々有名になつた人は四段本田増次郎君であらう。」

という言葉を書けるまでもなく、増次郎にとって、弘文館に於ける四年余の生活が、彼の生涯を決定づけるほど、大きな意味をもつたであらうことは想像に難くない。

一八八九年（明治二年）九月、嘉納は宮内省命により欧州に外遊する。当時、真砂町に移されていた講道館と嘉納塾の事務処理の一切は、本田増次郎、西郷四郎、岩波静也の三名に托されていた。「略歴」によれば、

「然るに明治二十三年の春頃より本田君の一生涯に於ける大難問題は起れり。これ君の宗教上の信仰問題なり。君が潜に基督教に帰依し居たる信仰に基き君の改宗を嘉納先生並に講道館の先輩同輩に告白せざるべからざる所謂改宗の苦悶なり」

とある。増次郎の入信の動機が、純粹なキリスト教的信仰に基づいていたのか、英語学を通じて、先進国の宗教を新文明建設のため不可欠のものとしてとらえていたのか、或いはまたビューリタリズムにおける倫理主義が、生来潔癖な彼の心をとらえていたのかはわからないが、明治二十年前後に、キリスト教がめざましい発展をとげていたことは、十五年に四千人余であった信徒が、二十三年には三万四千人に達していたという事実からも明らかである。しかしまた一方で

「明治二十年代は国粹主義の勃興を背景として、いわゆる破邪顕正運動がさかんであった。思想的に言えば、皇室や日本国家とキリスト教は両立しないという点、キリスト教の植民地主義や平等博愛論は日本にとって害悪であるという点、キリスト教は科学と一致しないという点、キリスト教の社会倫理が日本と合わないという点などであった。」

(川崎庸之、笠原一男編「宗教史」)

こういう時代、しかも恩師嘉納の留守中に入信を決意した増次郎の苦悩は並々ならざるものであったろう。明治二十三年九月二十八日、受洗した増次郎は、四十年にわたって欠かさず書き記した日記の一頁に、多年訓育をうけた嘉納の恩義に対し申し訳ないことを記し、入信の是非正邪は棺を蓋うの日に於て自ら判明すべし、と記さざるを得なかった。

一八九一年(明治二十四年)一月、外遊から帰国した嘉納は、八月に文部省から熊本第五高等学校校長兼文部省参事官の辞令をうけて、九月、新妻を残して単身赴任した。この時、嘉納は増次郎を同校教授に推しているから、増次郎や周囲が心配した程、彼の入信について頓着していなかったのであろう。二年後、嘉納が帰京したことや、宣教師

団の大阪高等英学校への強い勧誘もあって明治二十六年四月、第五高等中学校を依願退職している。

桃山学院の前身である高等英学校は、一八九〇年（明治二三年）の開校であるが、この時期、現天王寺筆ヶ崎に校舎を新築し、ブライス校長、ブレイビー副校長のもとに、二十八名の生徒が学んでいた。九〇年史によれば、明治二十六年、ブレイビー副校長が何らかの都合で一時学校を離れなければならなかったと考えられるので、その後任として増次郎が招請されたのであろう。「略歴」には

「経営三年大に見るべきものありたり」

というが、残念ながら、高等英学校時代の業績を知る資料は殆んど残っていない。ただ、この時期在学していた猪飼正雄（明治三〇年卒業）は、後年同窓会誌の中で、記憶に残る恩師の名前を挙げ、副校長本田先生は英語、倫理を担当、また

「本田先生には学課の外に柔法を教わった。剛情であった為でもあろうが人よりは特に激しく教えられたらしい。先生には先生の御生涯を通して可愛がられたことを感謝している。」

と述懐している。柔道の教育的価値が認識され、学校体操（正科）の一部として認められたのは明治四十四年のことであるから、課外とはいえ、増次郎は恩師嘉納がそうであったように、早くから得意の柔道を教育の一環として位置づけ、厳しく生徒の人格形成に努めたものと思われる。宗像逸郎は追悼文に

「君は才人であると共に立派な人格者であった。君は快活で慈愛に富んで居たので、少年や青年は自然と君に親みなつき、同時に自然と君に感化されることが多かった。」

と書いている。増次郎の薫陶をうけたものは猪飼一人にとどまるまい。文武両道の人、本田増次郎にとって面目躍如たる時期ではなかったか。

日清戦争後の一八九六年（明治二九年）、中国政府派遣の留学生教育にあたるため、嘉納によびもどされた増次郎

は、高等英学校を辞職して帰京した。翌年、東京高等師範学校教授に任ぜられた彼は、三年後には東京外国語学校に転じ、一九〇二年（明治三五年）から三年間は、その両方を兼任した。後の明治四十二年発行の「基督教週報」第一九号によれば、明治三十二年一月より三十五年七月まで、立教高等女学校の校長をも兼任したというからその日常は多忙を極めていたにちがいないが、同時期、富田常次郎の追憶によれば、柔道参観のため講道館を訪れた英国艦隊のために通訳を買ってで、同席した英大使をして柔道よりも彼の流暢で上品な英語を感嘆せしめたという逸話も残っているし、英国の女流作家シェーエルの「黒馬物語」(Black Beauty)の本邦初訳を完成させたのもこの頃であったから、増次郎にとっては最も脂ののりきった時期でもあったろう。

紙面の都合上、後は簡単に書く。

一九〇五年（明治三八年）、官命により英米留学を命ぜられた増次郎は、日露戦争の直後のことでもあり、以後はもっぱらジャーナリストとして、我が国の外交上の立場を援護すべく、英米各有力紙にその健筆を揮い、一九一三年（大正二年）春帰国する。爾来、大正八年、パリ講和会議に際し欧米を一巡したことを除いては、増次郎の生涯のうちでも最も平穏で安堵の日々が続く。この頃十七歳になっていた、ただ一人の娘華子は

「十一以来、家というものから全く離れて生活してきた私と五十年振りに始めて親と子との真の家庭を持った父とは、最初は何となく気づまりでしたけれど、何時となく打解けて後には随分我儘もいひあえるやうになりました」と回顧している。その華子が大正八年に結婚してからは、増次郎にとって孤独の日々の連続であった。日本及び中国古代史の英訳や正倉院美術の英文記録の作成の仕事が、この孤高な英学者の唯一の慰めであったにちがいない。

関東大震災後、家財道具一切を整理して大森ホテルに移り住んでいた彼の最後の英文日記は、慢性の腎臓炎からくる不快さと人恋いしさがにじみでている。孤独からのがれようとして郷里岡山行を決意した増次郎は、昵懇の内野倉

医師を訪れ、衰弱がひどいから今少し静養してからの方がよからうという医師の忠告を聞きいれず、買ってこさせた切符を握りしめて床に就いたまま帰らぬ人となったのである。時に一九二五年（大正一四年）十一月二五日還暦の年であった。親友富田常次郎は、嘉納塾同窓会報に

「本田君は文学者だけに、其死や誠に静にして且つ美であった。若し忌憚なく言えば、君の最後は、君の境遇上実に理想的であったと私は思ふ」と書き記している。（文中の敬称は省略した）

〔委員、高等学校教諭〕

註

「嘉納塾同窓会報」は立教女学院高等学校菅原涼子教諭のご好意によりコピーを頂きました。